

2025. 9. 28 (日) 使徒26:24～32

26:24 パウロがこのように弁明していると、フェストゥスが大声で言った。「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」

26:25 パウロは言った。「フェストゥス閣下、私は頭がおかしくはありません。私は、真実で理にかなったことばを話しています。」

26:26 王様はこれらのことをよくご存じですので、その王様に対して私は率直に申し上げているのです。このことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも、王様がお気づきにならなかったことはない、と確信しています。

26:27 アグリッパ王よ、王様は預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」

26:28 するとアグリッパはパウロに、「おまえは、わずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にしようとしている」と言った。

26:29 しかし、パウロはこう答えた。「わずかな時間であろうと長い時間であろうと、私が神に願っているのは、あなたばかりでなく今日私の話を聞いておられる方々が、この鎖は別として、みな私のようになってくださることです。」

26:30 王と総督とベルニケ、および同席の人々は立ち上がった。

26:31 彼らは退場してから話し合った。「あの人は、死や投獄に値することは何もしていない。」

26:32 また、アグリッパはフェストゥスに、「あの人は、もしカエサルに上訴していなかったら、釈放してもらえたであろうに」と言った。

<説教>

使徒パウロは、ユダヤの王、アグリッパの前で弁明しています(26:1～)。弁明といっても内容は〈天からの光〉(13)、〈天からの啓示〉(19)である主イエス・キリストの証しであり説教でした。キリスト教会とのかしらイエスに対する徹底的、熱心な反対者、迫害者としてキリスト者たちを捕まえてキリスト信仰を棄てさせ、言うことを聞かない者たちは殺してもいいと息巻いていたパウロを主イエスが捕らえ、反キリストの思いを捨てさせ、主イエスの使者としてイエスのために働くしもべに造り変えてくださいました。それでパウロは、イエスを信じる信仰によって罪の赦しを得、悔い改めて闇から光に、悪魔の支配から神の支配へと立ち返り、悔い改めに相応しい信仰による歩みをするようにとユダヤ人にも異邦人にも宣べ伝えて来ました。このように主イエス・キリストを信じ、主イエスに従って、主イエスの福音をユダヤ人にも異邦人にも宣べ伝えて来たので自分はユダヤ人たちに捕らえられ、殺されようとしているのだとパウロはアグリッパに証言しました。そして、アグリッパもよく知っている聖書の中で預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語っていた「苦しみを受け」「死者の中から最初に復活し、ユダヤ人にも異邦人にも光を宣べ伝えることになる」キリストとはこのイエスのことなのだと証言したのです。

しかし、ここでアグリッパ王たちとともに聞いていた総督フェストゥスがパウロの話を遮ります(24)。フェストゥスは前任の総督フェリクスからこのユダヤ人がパウロを訴えている裁判を引き継いでいました。争点はユダヤ人の宗教(ユダヤ教)に関することだと

フェストゥスは理解していました。それはローマ法では死罪に当たる問題ではありません。ユダヤ総督になったばかりのフェストゥスにはユダヤ人の問題を扱うにはまだ不慣れで、この問題をどう取り調べたら良いのか見当もつかず、しかもパウロはローマ皇帝カエサルに上訴するとまで言うので、ではその訴える理由を皇帝にどのように説明しようかとフェストゥスはますます困っていました。それでアグリッパにこの話しをすると、アグリッパがパウロの話しを聞いてみたいと言ったので、これ幸い、パウロの話しを聞いたアグリッパから何か良い助言がもらえると期待したのでしょう(25章)。しかし、パウロがアグリッパに話したことは、フェストゥスにとっては結局前と同じ、ユダヤ人の宗教の問題でした。更にはパウロの話しは天からの光を見たのだ、天からの幻に背かずだの、預言者たちやモーセが語ったことだの、苦難と復活のキリストだのと、全くちんぷんかんぷんだったようです。それで、もう我慢ができずにパウロの話しに割って入ったのでしょう。

しかしパウロは落ち着いて、冷静に反論しました(25)。「真実」とは「真理」とも訳される言葉です。パウロは自分の身に主イエスがしてくださった〈真実〉を証言しました。またそれは「真理」そのものであられるイエス・キリスト(cf.ヨハネ 14:6)のみことばとみわざの証言でした。十字架の死と復活の主イエス・キリストを信じて神に立ち返り(悔い改め)、それにふさわしい行いをするようにとの勧め、教えでした。確かにそういう私たちの信仰と悔い改め、そしてそれにふさわしい行い(今パウロがしている証し、説教もそうですが)というものは、世の人たちの目には「頭がおかしい」「狂っている」「変な人だ」などと思われ、そう言われることがあります。それはあまり気持ちのよいことではありません。いや、人によってはそれこそが一番嫌なこと、それだけは避けたいことかもしれない。しかし、それでも私たち信仰者のうちでは、主イエスを信じ主イエスに従うが故のことばと行いこそは「真理で理にかなっていること」だと弁えましょう。もちろん自らの言動そのものが主のみこころにかなっているかどうかを常に吟味しつつです。

そうのようにフェストゥスに対しては冷静に反論しつつ、パウロは改めてアグリッパ王に向かって話し始めます(26-27)。フェストゥスには分からなくても〈ユダヤ人の慣習や問題に精通して〉いる(3)アグリッパ王なら分かるはずだと迫ります。〈これらのこと〉とは、アグリッパ王が聞いた真理で理にかなったこと、つまり預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語ったイエスの十字架の死と復活のこと、そのイエスがパウロの身になさったこと、それを受けてパウロがイエスを信じる信仰と悔い改めを宣べ伝えて来たことです。これらは決して世界の片隅で起こった出来事ではない(ということは世界の中心で起こったことだということです)が故にユダヤの王であるアグリッパはそのうちの一つでも見落としてはならない、よく目を凝らして見なければならないと迫るのです。確かに主イエス・キリストこそは天においても地においてもすべての権威を持っておられる(cf.マタイ 28:18)全世界の王、世界の中心なるお方です。その主イエスがパウロとともにおられるのですから、パウロがいるところ、そこは世界の片隅ではなく世界の中心です。アグリッパは個人としてもユダヤの王としても、目には見えないけれども世界の中心、王なる主イエスの前にいるのです。主イエスがアグリッパ王を見ておられました。その主の権威を帯びてパウロは王に迫りました。

パウロの迫りに対してアグリッパ王は明らかにたじたじとして「防戦」します(28)。

「預言者たちを信じているなら、預言者たちが語ったこの成就としての主イエス・キリス

トを当然信じることになる」という明らかな結論が分かったからです。そうなれば個人的にも、また公の王としても、つまり生活の全領域で自分中心ではなくイエスを中心としてイエスに従って生きなければならなくなることが分かったからです。それで、自分が主イエス・キリストを信じるにはまだ時間が、ことばや努力（欄外注）が足りないと言いつつ、逃げを打ちました。もちろんパウロにはそのことが分かりました。

それでもパウロは、いわば別の言い方でなおも主イエスを信じる信仰の勧めをしました(29)。「この鎖は別として、みな私のようになってくださいること」、それが「私が神に願っている」ことだ、と。もちろんこれはパウロが自分は立派だ、偉いなどと言っているではありません。「私のように、私の罪のために十字架で死なれ復活された主イエス・キリストと出会い、信じ、神に立ち返り、主イエスに聞き従う者になって欲しい」、「私のように、主イエスを世界の中心、王とし、主イエスとともに主イエスのおられる所すなわち世界の中心で生き、主イエスから受けた使命を全うし、主イエスをあがめ、主イエスを証しし、福音を宣べ伝える者になってほしい」ということです。

なお、「この鎖は別として」とパウロは言いました。「この鎖」つまり信仰の故の迫害、身体・いのちの危険は「別」です。確かに信仰の故の迫害、苦難、戦いは避けることはできません。私たち信仰者の側としてはその覚悟が必要です。ですからそういう「信仰の戦い」を予想し怯んで（アグリッパのように）信仰の決断をしないのは愚かなことです。しかし同時に、私たちの信仰は「死や投獄に値すること」ではない(31)こともきちんと弁え、こそこそしないで堂々と生きて生きたいと願います。信仰の故に「死や投獄」の危険に面している兄弟姉妹たちのために祈り、信仰の闘いを共にする者でもありたいと願います。

そうやってあらゆる所で主イエスを信じて主をあがめ、主に聞き従って生きましょう。